

めあてを意識した効率的な書写の授業

1 書写の授業でめあてを重視する意味

「労多くして、実あがらず。」

書写の授業では、技術面での確かな上達を感じられなければ、このようなイメージが付きまとうのも致し方ないだろう。私は、練習時間を多く必要とする、従来の授業観・指導観を変えなければ、この問題は解決できないと考えた。授業の取り組みとしては、日頃から文字を書くときに、字形や点画を正しく書こうとする意識を高めることを目指してきた。

めあてを重視する意義には、次の4点が挙げられる。

まず、子どもがめあてを意識するほど、自己評価の機会が増え、授業中に何度も自分で自分を磨くことができる。次に、学習形態の工夫で相互評価の機会も増え、お互いに高め合うことが可能になる。この2点だけを取ってみても、教師の直接指導が及ばないという問題点を少なからず解決できるはずである。更に、常にめあてを意識する学習方法が定着すると、日常生活における書写活動そのものが、書写技能の自己教育の場になるだろう。加えて、合理的な学習方法を模索する姿勢は、思考力・応用力を高め、いわゆる生涯教育の力を養うことにもなると考える。

2 第3学年のカリキュラムについて

子どもたちの多くは、3年生になって初めて毛筆書写の授業に取り組むことになる。4月当初は、道具の出し入れだけで1単位時間を費やしてしまう場合もある。まして、その中で子どもの思考力を高めつつ、技術力向上も図るのは厳しいことである。

現状では、私は原則として、年間35単位時間を2週に1度、2単位時間連続で振り分けるのがよいと考えている（国語の他領域と同様に、言語事項の一単元として、更に連続した何時間かを編成する場合もある）。結果として効果的な練習時間の確保も可能になる。

小学校の学習指導要領では、第3学年の指導内容として、基本的な筆づかいを習得した上で、点画の長短・方向を意識して書くことを主なものとしている。この考え方に大筋で異論はないが、私の用意したカリキュラムでは、文字の組み立ての学習を主とした内容もはいつている。これは、基本的な点画の学習をする上で、文字の組み立ての学習にもかなり踏み込まなければな

らないと判断したからである。また第3学年から学習する漢字は、量が増えるだけでなく、複雑な字形のものも多くなる。従って、早い時期で文字の組み立てを意識して書く学習が必要とも考えた。

以上の考えを基本にして、次のようなカリキュラムを用意した。

単元	教材	学習内容	時数
オリエンテーション		道具の出し入れ、扱い方	1
横画	「三」	漢字における横画の多さと性質を考える	2
縦画	「土」	漢字における縦画の役割を考える	3
はらい	「大」	「はらい」の形はなぜ違うのかを考える	3
おれ	「日口」	「おれ」の角度はなぜ違うのかを考える	3
によう	「道」	「によう」の書き方と組み立てを考える	3
はね	「南」	「はね」の意味と角度を考える	3
競書会		競書会に出品する	3
年賀状		葉書や手紙の書き方考える	4
れっか	「馬」	「れっか」の意味と書き方考える	3
まがり	「元」	「まがり」の意味と書き方考える	2
そり	「気」	「そり」の意味と書き方考える	4

各単元とも硬筆の指導を含めて配してある。競書会については、子どもたちの意欲を喚起するために1回だけ参加した。参加費不要で、できるだけ入選率が高く、課題の難しくないもの（カリキュラムの流れにあったもの）を選んだ。「そり」単元の時数が多いのは、3年の学習のまとめとして、2字教材「元気」の清書を完成するためである。

3 具体的事例～単元「によう」教材「道」の実践から

(1) 単元設定の理由

「しんによう」を部首にもつ漢字は、既に第2学年で5文字学習している。第3学年では7文字登場する。

遠 近 週 通 道 運 進 送 速 追 返 遊

これらの漢字は使用頻度が高い文字である。しかし、2画目の形や運筆、「しんによう」と「つくり」の関係がとらえにくいいため、子どもたちの多くが苦手になっている。

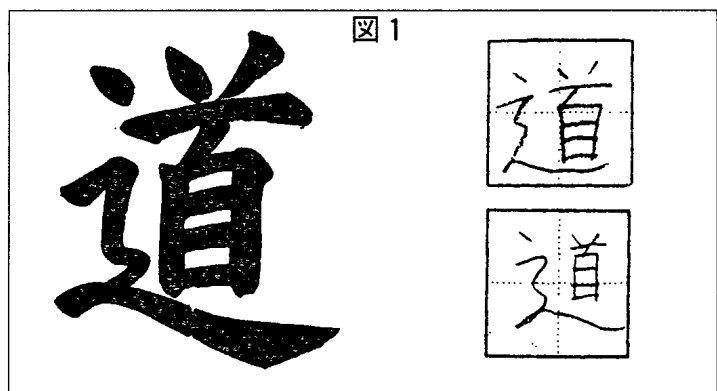
実態としては、図1のように「しんにょう」と「つくり」がばらばらになったり、文字全体が中心より右に寄ったりする傾向がある。また、「しんにょう」の2画目は平仮名の「ろ」に似た形になりやすい。

前者の原因は、「つくり」を右半分に置こうとすることにあると分析できる。おそらくは、いわゆる「へん」と「つくり」から成り立っている漢字の組み立てに影響されているのだろう。後者は、初期の「しんにょう」の書き方の指導をそのまま引きずっていることと、活字体の影響を受けていることが考えられる。

指導のポイントは、正しい「しんにょう」の形を理解することと、「つくり」をほぼ中心に書くことにある。「しんにょう」は、人間が荷車を引く姿から成立した部首であることを考え、「しんにょうの荷物はまんなかにおこう」というめあてで学習できる授業を計画した。

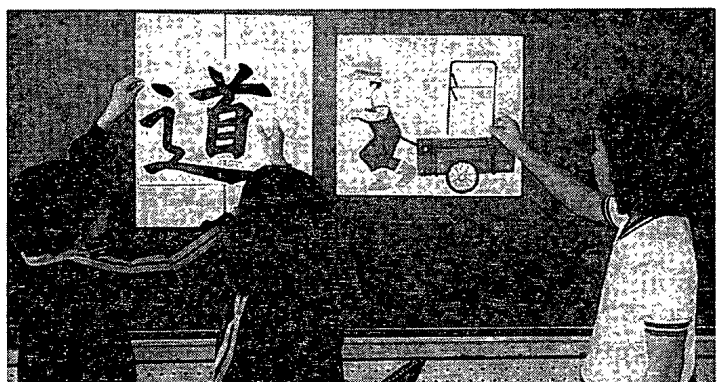
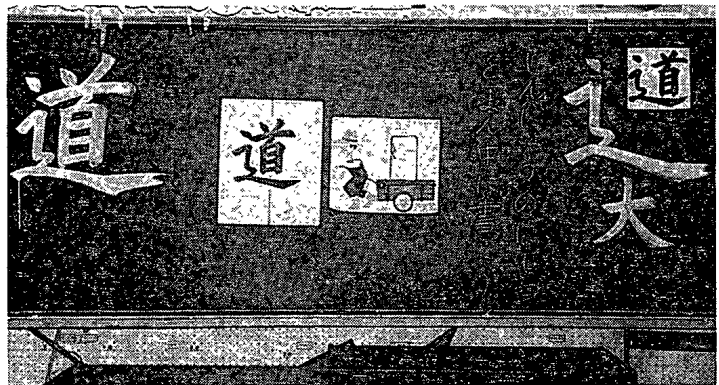
(2) 指導目標

- ・「しんにょう」の正しい書き方を理解して書くことができる。
- ・「しんにょう」と「つくり」の関係に気付き、文字の組み立てのポイントをつかむことができる。
- ・自分なりの問題意識をもって、学習に臨むことができる。
- ・文字感覚を養い、字形を意識して文字を書くことができるようになる。



理想的な「道」

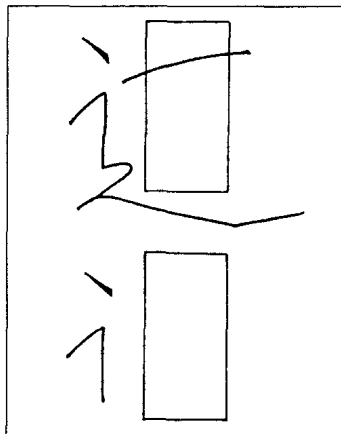
子どもの実態例



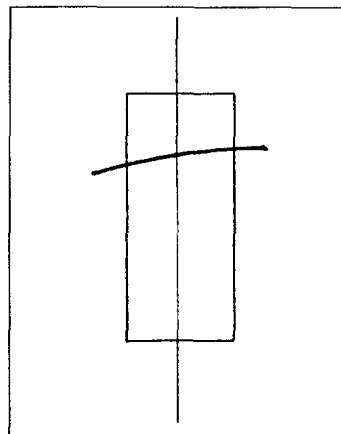
(3) 具体的な学習展開 (2 単位時間扱い)

子どもの学習活動	指導と支援
<p>①出会う</p> <p>1. 本時の学習内容を知る。</p> <p>○しんじょうの書き方を知る。</p> <p>2. 「道」を試書する。</p> <p>○1枚だけ書く。</p> <p>3. 試書を観察して、課題に気付く。</p> <p>○気付きを書き込む。</p> <p>○手本と比べてみる。</p> <p>②つかむ</p> <p>1. 気付きを発表する。</p> <p>2. 気付きを分類・整理する。</p> <p>○気付きを分類の観点によって整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しんじょうの書き方に関わるもの ・文字の組み立てに関わるもの ・筆使いに関わるもの ・書くときの姿勢に関わるもの <p>2. 共通の学習のめあてをもつことができる。</p> <p>○「道」を書く上で、最も着目すべき点を取り上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整理した気付きを学習する場合の、優先順位を考える。 ・しんじょうとつくりの関係について、成立から考える。 <p>◎めあて しんじょうの荷物はまん中に書こう</p> <p>③見通す</p> <p>1. 学習のめあてに取り組む上で、どのような練習をすればよいか、見通しをもつことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しんじょうの書き方の練習。 ・つくりを中央に書く練習。 <p>④書く</p> <p>1. 学習のめあてを意識して練習する。</p> <p>○学習シートを使って書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部分練習→組み立ての練習 ・グループ内で相互批評を行い、練習方法の点検をする。 ・優れた意見や練習成果を発表する。 <p>2. 練習の成果が表れた作品を、清書として選ぶ。</p> <p>○学習のめあてをふりかえる。</p> <p>3. 清書に配置や大きさを考えて、名前を書く。</p> <p>⑤確かめる</p> <p>1. 学習をふりかえて自己評価を行う。</p> <p>○学習のめあてを確認する。</p> <p>○硬筆で書く。</p> <p>○成果と課題をまとめる。</p> <p>⑥片付ける</p>	<p>しんじょうを部首とする漢字の想起を促す。</p> <p>2画目の書き方をわかりやすく指導する。</p> <p>練習シート1を配布する。</p> <p>失敗を恐れないように声をかける。</p> <p>手本を配布する。</p> <p>予想できるものは、予め掲示として用意する。</p> <p>整理しやすい板書をする。 (箇条書きにまとめる、など)</p> <p>多くの子どもが、問題としている点に注目するよう促す。</p> <p>組み立てや基本的点画の成立理由に注目するよう促す。</p> <p>パズルを利用する。 (写真1, 2)</p> <p>学習のめあてを意識するよう促す。</p> <p>予め教師が用意していない練習方法が提示された場合は、子どもたちで工夫するよう促す。</p> <p>練習シート2, 3を配布する。 (資料1)</p> <p>机間指導のときは、個人でなくグループ単位で意識付けする。</p> <p>意見や成果は積極的に評価する</p> <p>清書は自分で選ぶように徹底する。</p> <p>ふりかえりカードを配布する。 (資料2)</p> <p>ただうまく書けたかどうかではなく、学習のめあてを意識した評価をするよう促す。</p>

資料1

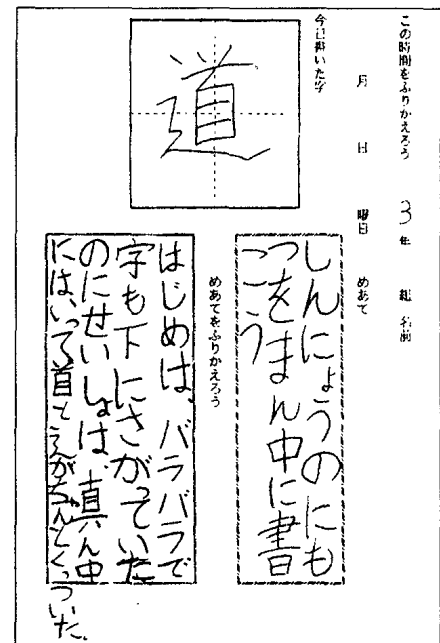


練習シート2



練習シート3

資料2



ふりかえりカード

(4) 子どもの反応例

女児A：めあてをもつ前は、ばらばらに（「首と「え」を）してしまった。けれども、めあてをもって書くと、ちゃんと「道」とばらばらにならずに書けました。今度から、先生に言われなくても、めあてをもつようにしたいです。

男児B：・一番始めにかいたじは、にもつが右よりだったのに、一番さいごのせいしょは、ちょっとは、まん中によったと思います。
・まん中にいっても、にもつがつぶれていたのに、さいごのせいしょは、うまくできたと思う。
・バランスが（字の）うまくなってきたと思います。

女児C：はじめは、うしろにもつがあったけど、せいしょはきちんと、まん中にもつをのせました。

男児D：さいしょはにもつ（首）が右がわによりすぎて、しんにようがはなれてしまったんだけど、練習したらできたので、こんどからもわすれないようにしたいです。

女児E：さいしょ、ちょっとにもつをうしろにはなしすぎたけど、練習すればするほど、うまくかけた。ピース

男児F：さいしょの字はぜんぜんまんなかに、いっていなかったから、こんどは、はんしをおってからかいたらいいと思う。

子どもは、予想以上にめあてを意識して書き、その成果を感じているよう

に思われる。今後は、「ふりかえりカード」で学習方法のふりかえりを行う機会を作る必要がある。

(5) 成果と課題

資料を見てもわかるように、子どもたちがめあてを意識して書く、という点については十分な成果が上がっているようだ。技術面だけ見ても、本時で設定した学習のめあてについては、39人中38人の子どもが達成できている。

子どもたちが日頃、うまく書けないと悩んでいる部分を分析し、把握できていたことが一因であろう。また、「どうしてお手本のように書かなければいけないの?」という、学習活動の必然性に関わる点について考え、気付く学習を組んだことが功を奏したと思われる。グループや個人の評価活動を取り入れたことで、手本を真似るため教師に頼るのではなく、自分たちで学習を高め合おうとする姿勢も育っている。

せっかく培った意識や態度を今後どのように定着するかが、最も大きな課題となる。勿論、本時を生かした効率的な硬筆書写学習の設定が必要である。更に、書写の時間の枠を超えて、漢字学習の時間や作文の時間、視写などの活動の中でも日常的に指導していくことが大切である。その意味で書写の時間が書写の時間の中だけに留まらず、あらゆる生活の場面で生かされるよう工夫しなければならない。この実践で示したように、書写で思考力・認識力を高めることは、当然意識されるべきなのである。 (岩本 和貴)